

文徵明の生涯と芸術

内山 知也

一、蘇州における芸術の伝統と文徵明

文徵明⁽¹⁾(一四七〇—一五五九)は沈周(一四二七—一五〇九)の没後、文人画の伝統を継ぎ、その長い生涯を通じて、蘇州画壇文壇の中心的人物であった。沈周と文徵明の二人を文人画の悠久な伝統の後継者として最初に記述したのは、明末の董其昌(一五五〇—一六三六)である。その画禅室画旨には、

文人の画は王右丞(維)自り始まる。其の後董源・巨然・李成・范寛、嫡子と為り、李龍眠(公麟)・王晋卿(詵)・米南宮(芾)・及び虎兒(米友仁)、皆董(源)・巨(然)従り得來る。直ちに元に至り四大家黃子久(公望)・王叔明(蒙)・倪元鎮(瓚)・吳仲圭(鎮)は皆其の正伝なり。吾が朝の文(徵明)・沈(周)則ち又遠く衣鉢を接ぐ。馬(遠)・夏(珪)及び李唐・劉松年に及んでは又是れ大李將軍(李思訓)の派にして、吾が曹^{とくから}の当に学ぶべきに非ざるなり。

と記し、さらに董其昌自身も文徵明を学び、文人画の伝統を継承する者であると自認している。

このような伝統意識を別にしても、沈周・文徵明らは、在世のうちからその名声は天下に轟いていた。何良俊(嘉靖間の翰林院孔目)は四友齋叢説の画論において、明朝画院の画家と文人画家を掲げて紹介し、次のように記録している。

我が朝の列聖宣廟(宣宗)・憲廟(憲宗)、孝宗、皆画を善くし、宸章^{しんしやう}輝煥^{くわん}して、蓋^{おほ}し皆能と妙の間に在り。

我が朝、特に仁智殿を設け、以て画士を勉く。一時、院に在る者、人物(画)は則ち蔣子成、翎毛(画)は則ち隴西の辺景昭(文進)、山水は則ち商喜・石銳・練川・馬軾・李在・倪端・陳暹。季昭は蘇州の人、鍾欽礼は会稽の人、王誥・廷直は奉化の人、朱端は北京の人なり。然れども此の輩は皆画家の第二流にして、但だ能く之を能品に置くのみ。我が朝に画を善くする者甚だ多し。行家の若きは当に戴文進(進)を以て第一と爲し、而して呉小仙(偉)・杜古狂(董)・周東村(臣)は其の次なり。利家は則ち沈石田(周)を以て第一と爲し、而して唐六如(寅)・文衡山(徵明)・陳白陽(淳)は其の次なり。

ここにいう行家とはおおむね職業画家を指し、利家(或は原家・隸家)とは文人画家を指しているのであって、画院の戴進と沈周が明朝画家の双璧と見なされ、その次に続く者として画院では呉偉・杜董・周臣、文人画家では唐寅・文徵明・陳淳の蘇州人が考えられているのであった。まさに蘇州画壇が中国美術の中樞を占めていたことを知るのである。

蘇州画壇の形成者であり、その最初の指導者であったのは沈周である。沈周の後継者は文徵明、徵明の後継者は陳淳である。彼等はすぐれた指導者に教えを受けることができたから拔群精妙の画を描くことができたのだ、と主張するのは、明の唐志契の説である。その著、絵事微言に、

凡そ画の入門には名家の指点を必須とし、理路をして大に通ぜしめ、然る後に各一家を成すを妨げず。甚しきは青藍より出づるも、未だ知る可からざる者なり。若し名家の指点に非ずば、須らく重資を惜しまず、大いに古今の名画を積み、朝夕探求し、下筆すれば乃ち能く精妙人に過ぎしむべし。苟し僅かに庸流の筆法を師とせば、筆下定らず是れ庸俗にして、終に超邁する能はざらん。昔関仝荆浩に従ひて全之に勝り、李竜眠(公麟)は顧(愷之)・陸(探微)・張(僧繇)・呉(道玄)を集めて自ら戸庭を闢き、巨然は董源を師とし、子瞻(蘇軾)は興可(文同)を師とし、衡山(文徵明)は石田(沈周)を師とし、道復(陳淳)は衡山を師とす。(中略)信に画の淵源自る有るかな。

と言い、優秀な師が得られない時は、金に糸目をつけず古典的名品を購入し、その筆法を自習すべきだと言う。

蘇州の文人たちが、その両者に恵まれていたことは言うまでもない。

そういう恵まれた蘇州画壇に対しても、嚴格な批評を下す人がいた。明末の范允臨（一五五八—一六四一）は輪廓論画において、呉の文人の中に古典学習を怠るもののあることを指摘して次のように言う、

書を学ぶ者は晋の轍を学ばざれば、終に下品と成る。惟れ画も亦然り。宋元の諸名家、荆（造）、関（仝）・董（源）・范（寛）の如き、下は子久（黄公望）・叔明（王蒙）・巨然・子昂（趙孟頫）に逮ぶまで、矩法森然として画家の宗工巨匠なり。此れ皆胸中に畫有り、故に能く自ら邱壑を具ふ。今の呉人は目に一字を識らず、一の古人の真蹟を見ずして、輒ち心を師として自ら創る。惟だ一山一水、一草一木を塗抹すれば、即ち之を市中に懸け、以て斗米に易ふ。画那んで佳なるを得んや。間法を名公に取る者有るも、惟だ一衡山有るを知り、少少髣髴とし、摹擬僅かに其の皮膚に形似するを得るのみにして、曾て其の神理を得ず。曰く「吾れ衡山を学ぶのみ」と。殊に衡山皆法を宋元の諸公に取り、務めて其の神髓を得たるが故に、能く独り一代を擅にし、不朽に垂る可きを知らず。然れば則ち呉人何ぞ衡山の祖師を追遡して之に法らざるや。即し上、古人を追ふこと能はざれば、下も亦た衡山為るを失せざらん。此の意、惟だ雲間（派）の諸公のみ之を知る。故に文度（趙左）・玄宰（董其昌）・元慶（顧元慶）の諸名氏、能く力めて古人を追ひ、各自家を成す。而るに呉人見て詫しみて曰く「此れ松江派のみ」と。あゝ、松江とは何の派ぞ。惟だ呉人のみ乃ち派有るのみ。

この発言は、文徵明たちの末流の画家に投げかけられた批判である。ただ技巧の模倣だけの安易な売画を否定し、古典的基礎の必要性を強調している。中でも文徵明こそ広く古画を学習したから、時代の代表者となり、永遠の名声をかちえたのであると主張している所は注目すべきであらう。

古画の学習は、又沈周についても同様であって、何良俊は四友齋画論に於て、

沈石田の画法は董（源）・巨（然）中より来る。而して元人四大家の画に於て、意を極めて臨摹し、皆其の三昧を得たり。故に其の匠意は高遠にして、筆墨は清潤なり。而して染渲の際に於て、元氣淋漓、誠に所謂「詩中画有り、画中詩有り」者の如し。昔人は、王維の筆を、「天機の到る所にして、画工の能く及ぶ所に非

ず」と謂ふ。余も「石田亦た然り」と謂はん。

と述べ、沈周が五代・北宋の画家董源と巨然の画から画法を習得し、元末の四大家（黄公望・倪瓚・王蒙・呉鎮）の画の臨模に努力して、その精神を得たことを主張している。

沈周・文徵明・唐寅らは宋元の古画を見て臨模しただけでなく、当時に於ても稀購品であった唐代絵画を見る機会を持っていた。所蔵者は呉の人王鏊や徐有貞らの高官文人であった。沈周らはこれら高官と交わり、その秘蔵品を鑑賞し学習することができたのである。明の張泰階の宝繪録叙論にはこの事情を伝えて、

延いて我が明に至り、諸図或いは内府に帰し、或いは王文恪（鏊）・徐默菴（有貞？）の購う所と為り、而して善くする所の呉匏菴（寛）・沈石田・文衡山・唐子良・祝希哲（允明）の諸君子も亦た各々出して品題し、吟咏殆ど徧ねし。故に匏菴・衡山の趙松雪（孟）の画を評して皆「唐の法を摹倣す」と云ふ。其の子久を評するや、亦た然り。且つ「唐人の画法を見るの屢々ならざる、松雪の自りて来る所を知らず」と云ふ。其の語意に拠れば、沾沾として唐画を見るに及べるを以て幸と為す。然れども亦た此の數図のみ、其餘は聞く無し。

と言っている。沈周らは元の大家たちの画を批評するさいに、自分たちがかつて鑑賞した唐代絵画や宋代絵画の筆法と比較することによって、彼等が古典のいかなる継承者であるかを論じていたのである。大観録に引くところの匏翁論画に呉寛の次のような文徵明評があるが、そこにも文徵明が唐人の筆法を暮したと言っており、呉寛もまた鑒蔵家の一人であったことがわかる。

文徵仲（徵明）の書画は当代の宗匠為り。用筆・設色は古人に錯綜し、間逸清俊、纖細奇絶、丹青の鑿習を一洗す。此の卷（関山積雪図）は蓋し唐人の筆を摹せるなり。河陽（李唐？）を廝養とし、千里（趙伯駒）を衙官とす。信なるかな此の公、神奇測るなし。

また明の唐志契の絵事微言においても、

屠赤水云ふ、沈石田は諸の旧筆の意に倣ひ真を奪ふ。独り但迂（但瓚）に於て似ず。蓋し老筆の之に過ぐ

ればならん。

と、沈周が先人の筆法を学び、その優れた所と精神を吸収していることにふれている。

沈周も文徵明も、また唐寅も、このように恵まれた蘇州の環境の中で努力精進を続け、ついに高い境地に至った。彼等の青年時代と円熟期とは当然作風を異にしていたのである。沈周について、明の張丑の清河書画舫には、

石田の少時の画本は盈尺の小景に過ぎず。四十の外に至り、始めて拓いて巨幅を為る。粗株、草々にして成る。構李の項氏の蔵せる翁の荷香亭巻の樹石屋宇は、最も精細秀潤にして、乃ち是れ早歳の作なり、然れども遠く蔡氏の仙山樓閣巻に及ばざるなり。蓋し仙山（樓閣図巻）は乃ち翁の盛年の作る所なり。自跋に掘るに云ふ「此の巻、心を留むること二年にして始めて緒に就く。其の間、千山万樹、寸屋分人、各々生態有り。」と。荷香亭巻に比するに尤だ細潤なるを覚ゆ。而して筆力又蒼古を極め、集大成の手と稱するに足る。之を唐宋名画目中に求むるも儔罕なり、真に一世に雄視す可し。

と記録している。

又、文徵明にも筆法の変化のあったことを、明の張泰階は宝繪録叙論において次のように述べている。

衡山（文徵明）は初年に多く偏鋒を用ふ。故に声名特に噪し。晩年に泊び漸く醇正に趨く。閩呉梅菴（鎮）の筆意を用ひ、一種天然の秀善、渾厚和平の氣、人の眉宇を摸ち、一望にして端人正土の作たるを知るなり。大都精を松雪（趙孟頫）に取り、而して大癡（黄公望）・黄鶴（王蒙）の間に入出入す。或は曰く、「唐に摩詰（王维）有り、元に松雪有り。公は其れ接武か、若し荆（浩）・関（全）の峭勁、北苑（董源）の皴法を以て之を補はば、更に遺憾無からん」と。

これらの批評は、画風の変化だけでなく、特色を巧みにとらえ、絵画史において与えられるであろう彼等の位置を特記している。こういう批評行為は、作品の手法及び精神の分析総合を瞬時に行い、併せて芸術論や芸術史にも論及するという、中国文芸批評の直観的特質を同時に示して興味深いのであるが、張泰階の場合多分に無

いものねだりの欲張りな評でもある。

以上、蘇州文人の絵画に対して明人によって与えられた批評を一瞥した。その批評は一見して賞賛に満ちているが、それが過褒でないことは、彼等の批評が実に筆法や着色や風格・構成に至るまで分析して得られた結果であり、豊富な鑑賞経験と画学研究の成果に基づくものであることよって、証明されるであらう。

本論は、このような芸術背景にあって、文徵明の詩文を通じての生涯を描こうと努めるものである。詩書画三領域の融合の上に立つ文人芸術の伝統成立の秘密の一端に迫ることがその目標である。

二、文徵明の伝記資料及び文集

文徵明の伝記は明史卷二八七文苑三に載せられているが、詳しくは文徵明の子文嘉の撰に成る先君行略、王世貞の文先生伝がある。また、江兆申氏の文徵明画繫年年譜（民国六五年一月五日おりじん書房刊）及び文徵明與蘇州画壇（民国六六年一月国立故宫博物院刊）の年譜がある。両者の内容は同一であって、前者には日本語訳が附いている。しかし訓読法など適切を欠く所があるのは惜しまれる。江氏の年譜は、詳細を極め、特に絵画の製作年代を決定し、題跋題画詩の文集に欠落しているものを補い、書画の鑑識及び伝記検索に欠くべからざる労作である。

文徵明の詩文集「甫田集」や鈔本は十種（十種）近くある。明代芸術家文集彙刊甫田集の叙録によれば、初刻本は嘉靖癸卯二十二年（一五四三）の刊である。四巻より成り、編年式に作品を配列する。弘治庚戌三年（一四九〇）から正徳甲戌九年（一五一四）に至る二十四年間、すなわち徵明二十一歳から四十四歳に及ぶ二十四年間の詩五百首を取っている。明の魚竑の国史経籍志に著録されているのがこの集で、四庫簡明標注邵燦統録に「傳元叔に文太史詩四巻有り、嘉靖癸卯刊本、十二行二十字、南充の王延の序」と記録されている。次に嘉靖末年、文徵明の没後に刻されたものがあり、三十五巻、附録一卷である。初めの十五巻は詩で、後の二十巻は散文である。附録

は、徵明の仲子文嘉の撰に成る先君行略である。この刊本は詩も編年で、文は文体によって分類される。冒頭卷末に序跋はなく、誰の編集であるかわからない。版は文家の家塾で雕版したもので、後世何度か印刷され、最後の印刷で、現在見られるものは、清の康熙年間、六世の子孫文然の修補本で、王世貞撰の文先生伝を補っている。三十五卷本は、文徵明の生涯の詩文を収めているが、刪削或いは遺漏したものが非常に多い。この本の第一卷から四卷が初刻四卷本に当るものの削除した詩が半ばを越えるのである。また清の沈叔埏（一七三六—一八〇三）の頤綵堂集巻一〇に「文氏の手蹟の冊子を以て之を贖す者有り。曲阿の賀燕徵の識語あり、先生壯年爲る所の古文辞を以て、小楷を用ひて之を書し、自ら匣中に蔵する者と爲す。内の陳匪之詩集跋尾・諸賢攷・光州劉氏旌門記・錢氏有斐堂記・行毀。別に李宗淵の温州府君遺事序・徐昌国歡歡集叙・自箴二首。及び自跋仿趙千里後赤壁賦圖は、集皆存せず」と記している。文徵明の文の散佚したものも非常に多い、といわれている。小論の掘ったのは主としてこの明代芸術家集彙刊本（国立中央図書館編印・民国五七年七月刊）である。四庫全書総目提要別集類二十五所収の甫田集もほぼこの本に等しい。

三、文徵明の家系

文徵明の家系について、徵明の次男文嘉（一五〇一—一八三）は先君行略にこう書いている、
 文氏は姬姓なり。裔は西伯より出づ。漢の成都守文翁より始めて蜀に著姓たり。

徵明の文氏が周の文王から始まるというのはおそらく文一族に伝わる伝承なのであろう。文翁は前漢書巻八九循吏伝にその伝記が見える。景帝（前一五六—一四一在位）の末年に蜀郡の太守となり、蜀の文化興隆のために、郡県の小吏を選んで都に留学させ、蜀の学校制度を作って教育レベルを向上させたことで有名である。文翁は蜀で没し、祠堂を作って祀られたといわれる。

行状は前漢より後唐に至る間の系譜を欠き、突然後唐の莊宗（李存勖）の帳前指使輕車都尉文時という人物に

下る。この人物については新旧五代史に伝を欠く。行略には続けて、

後唐の莊宗の帳前指使輕車都尉諱は時なる者、成都より廬陵に徙る。

と記す。五代より南宋末期に更に時代が下り、

十一世を伝へて、宋の宣教郎宝に至る。丞相信国公天祥と出づる所を同じくす。宝の官は衡州教授なり。子孫因りて衡山に家す。

悲劇的英雄文天祥が同族であると言っているが、天祥は吉水の人を称しているから、江西省吉安、廬陵を本貫としている点で、文宝以前の廬陵の文氏と近いことになる。ところで文徵明が衡山を号した理由は、この文宝を誇りとしていたからであろう。

やがて文氏は蘇州に移るようになる。その過程を行略は次のように記している。

元に諱は俊卿なる者有り、鎮遠大將軍湖広管軍都元帥佩金虎符鎮武昌と為る。六子を生む。長の定開は高皇帝（明の洪武帝）に従ひ偽漢（陳友諒）を平らげ、名を添竜と賜はる。功を以て荊州左護衛千戸を授けらる。

次の定聰は高皇帝に侍して散騎舎人と為り、贅いひもとして浙江都指揮蔡本の壻と為る。定聰は恵を生む。杭より蘇州に來り、張声遠に壻たり。遂に蘇の長洲の人と為る。

ここに、元末明初の高官文俊卿より、定聰、恵と下る二代はすべて入壻していることは興味深い。張声遠とはどのような人物であったか不明である。ともあれ恵は徵明の曾祖父であり、この時期に長洲県に定住したのである。

恵、洪字は公大を生む。始めて儒学を以て起家し、成化乙酉（元年、一四六五）の科の举人あたに中る。仕へて涑水県（河北省保定）学教諭と為る。

この文洪について、号は希素、涑水集、括囊詩稿があるといわれる。洪の正妻は早く死んだらしく、子の文林は継室顧氏から生まれた。顧氏も三十一歳で死んだので、再継室呂氏によって養育されたのである。行略は文林について述べる、

洪、林字は宗儒を生む、成化壬辰（八年、一四七二）の進士。永嘉・博平の二県事を歴知し、南京太僕寺丞に進み、仕へて温州府知府に終る。公の父なり。母は祁氏・安人を贈らる。継母呉氏、安人に封ぜらる。

徵明の母祁氏が亡くなったのは、成化十三年（丁酉、一四七七）、徵明八歳ころであった。甫田集卷二九祁府君墓志銘によると

先夫人（母祁氏）の亡ざるや、先君（文林）永嘉に官たり。余の兄弟才に数歳、家既に赤貧、又強近の親戚無し。府君（母の兄祁春を指す）数里の外に居り、率ね日に一たび吾が家に至り、黍衣統食、哺鞠周ねく至り、終に三年衰へず。時に于て府君微かりせば、余が兄弟且に死せんとす。

さて、徵明の母祁氏は、李東陽の懷麓堂文蘊卷二六所収の文永嘉妻祁氏墓誌銘によると、諱は慎寧といい、同郷の祁甫字は彦和の娘で、十九歳で婚約、二十二歳で嫁いできた。そして洪と継室に仕えた。文林が進士に合格すると、林に従って上京し、林が永嘉知県になると永嘉に従い、二男一女を養育した。林にとって父の洪が北方の官（涑水県学教諭）となり、帰郷しても扶養する者がいないことが悩みの種になった。祁氏は林に申し出て、二子をつれて蘇州に帰ることになった。林は感謝して妻子を故郷に帰したが、帰るとまもなく病気になる、成化十三年（丁酉、一四七七）三月二日、三十二歳の生涯を閉じた。時に徵明は八歳であった。これ以後、徵明は継母呉氏によって養育されることになる。

文林の蘇州城内における住所は、呉県志卷三九上によると、曹家巷に在った。

文温州林の宅は三条橋の西北、曹家巷中に在り。停雲館有り。子の待詔徵明も亦た此に居る。勤する所の停雲館帖十二種、世甚だ之を珍とす。

とあり、曹家巷は呉派画九十年展図録の蘇州城内図によれば、西方の三茅觀巷の祝允明の住居に近くさらに西すれば呉趨坊の唐寅の宅となり、閭門に至る、総じて蘇州城の西北部に位置する。

さて徵明の母の父祁甫字は彦和、号は怡間翁は「高朗にして客を喜み、客至れば觴詠すること終日なり、翁の家は充羨するに非ざるに、修供精整、往々にして命ぜずして具はる」（祁府君墓誌銘）という様子であった。徵

明はこのおおらかな外祖父の家に、しばしば実母に伴われて行つては可愛がられた。特に祁春は文林と極めて親密で数歳年長であり、文林より長生きをして正徳三年（戊辰、一五〇八）七十八歳で没した。徵明にとって祁春はよく気のつくやさしい外伯父だったのである。

文林については、楊循吉の文温州墓志銘、呉寛の文君墓碑銘、徐禎卿の文温州誄が詳しくこれらは文温州集巻一二に収載されている。

さて行略文は文徵明の記事に入る。本論はこの行略に沿いながら、彼の生涯と文学芸術の關係について論ずることにする。

四、文徵明の青少年期

行略文は徵明について次のように書き始める。

公諱は璧、字は徵明。後に字を以て行はる。更に徵仲と字す。世、本と衡山の人なるを以て、衡山居士と号す。学者稱して衡山先生と為すと云ふ。

徵明の書画の署名及び印を見ると、文璧・徵明・徵仲・衡山・文仲子・停雲・停雲館・悟言室・玉磬山房⁽¹⁰⁾などがあり、印も何種かを使いわけている。徵明が衡山を号したのは、儒学を以て立つた先祖文宝を誇りとし、また祖父文洪や父文林の学問を尊敬しているからに他ならない。

徵明が三歳の時、父林は進士に登第した。従つて洪以来の念願はここに果たされたのである。ところが祖父や父の喜こびとはうらはらに幼少年時代の徵明は、一見うすほんやりに見えたらしい。

少き時、外不慧のごとし。然れども敦確にして内敏なり。童穉に在りと雖も、人敢て易んじ視ず。

王世貞の文先生伝にも「先生、生まれて外稚。」云々とあり、本朝分省人物考巻二二の文璧の項にも同様に、さらに詳細である。すなわち、

八九歳の時、語猶ほ甚だしくは了了ならず。或いは其の不慧ならんことを疑ふ。温州公、独り之を異として曰く、「兒は幸に晚成なれば害無きなり」と。

とあり、徵明は言語障害を持つ子供だったのである。彼が後世「悟言室」という室号印を使用していたのは、或いは晩年に至るまで彼の言語障害は続いていたのかもしれない。その障害が少年の彼を内気にさせ、時々唐寅や祝允明のような暴れん坊たちの嘲弄の的になったのであるかと私は考える。そういう少年徵明の法器をただ父親だけが確信した。少年の母は早く死んだから、この父親が母親の役も引き受けた可能性がある。継室が来る間、亡母の兄祁春が数里の道を足繁く通って、家族の生活や子供たちの面倒を見続けた。この少年のもつ、外見おっとりとしていて、内面は鋭敏な性格を、周囲の人たちは見抜いていて、誰も軽視しなかったのである。

行略はさらに学習時代について記述する。

稍長じて書を読み文を作るや、即ちに端緒を見ず。尤も古文詞を為るを好む。時に南峰楊公循吉・枝山祝公允明、俱に古文を以て鳴る。然れども、年俱に公より長ずること十餘歳なり。公之と其の議論を上下す、二公、性行同じからずと雖も、亦た皆輩行を折げて、与に交はること深く、相い契合す。或ひと先君を祝君に問ふ者有り。君曰く、「文君は乃ち真の秀才なり」と。公の名既に起る。然れども、苟も人の為に述作せず。或いは其の名に托して文を為りて以て售る者有り。楊公輒ち能く之を弁ず。時に文定憂に家に居る。温州、公をして往きて之に従ひて遊ばしむ。文定、公を得て甚だ喜び、困って悉く古文の法を以て之に授け、且つ延譽を公卿の間に為す。

この行略の文には、幾つかの先後関係の問題がある。

まず、江氏年譜では、徵明が呉寛（一四三五—一五〇四）から古文を学んだことを、成化十四年（一四七八）九歳の時としている。呉寛は父の融の喪（？）に服するために、成化十一年蘇州に還つてき、沈周等との交遊を再開した。そして成化十五年帰京するまで、蘇州文壇の中心人物の一人として活躍していた。しかしこの時は、先述のように文林は永嘉知県として赴任しており、祁氏を失った後で、その葬儀に帰った後で呉寛に依頼したと

も考えられるが、九歳ではいかにも幼な過ぎるし、生活にも窮迫していた様子でもある。本朝分省人物志卷二〇 吳寛の項によれば、「弘治六年（癸丑、一四九三）吏部右侍郎に擢んでられ、七年（甲寅、一四九四）丁憂、九年（丙辰、一四九六）原職に補せらる」とあるので、吳寛の帰郷は徵明二十五歳から二十七歳の事になり、徵明の八、九歳のころは、翰林院修撰に在任中であつたらうと思われる。ただしその時期に服喪のため帰郷したことは記されていない。ともかく吳寛に古文を学んだとすれば、そのどちらかの時期であろう。行状の順序から言えば、楊循吉や祝允明等の先輩から学ぶことがあって、吳寛に教えを受け、知名人の間に紹介されて行くという順になっているから、江氏年譜の可能性はやゝ薄いと思われる。

王世貞の文先生伝によれば

先生既に長じ、外塾に就く。穎異挺発し、日に数千言を記す。嘗て温州公の滌に宦するに従ひ、文を以て莊景郎中に贄す。莊公読んで之を奇とし、詩を為りて以て贈る。然れども先生、其の緒を門人より得たれば、往々にして下学を舍いて上達を談ず。因りて口を絶して莊氏を名いはず。学び歸りて邑の諸生と爲る。

とあり、まずどこかの塾に入って学習したのち、父の滌（安徽省滁県）へ転任について行き、莊景に認められ、その門人より学んだらしい。莊景（一四三七—九九）は江浦（江蘇省江浦）の人で、成化二年の進士、翰林檢討を授けられたが、諫疏を奉って旨に忤い、桂陽判官に左遷され、ついで南京行人司副に改任となつたが、親の喪に服して帰郷してから二十数年、定山に卜居し、定山先生と称せられた人物で、弘治年間に及んで南京吏部郎中に起用される儒学者であつた。滁県と江浦は近接していたので、この高名な儒者のもとに遊学したことは充分に考えられる。しかし、徵明少年は莊景に直接指導を受ける程には成長していず、その門人あたりから手ほどきを受けたらしい。だから徵明としても、莊景から学んだとは恥しくて言えなかつたのである。行略にもこの事は省略されている。

行略は楊循吉（一四五八—一五四六）や祝允明（一四六一—一五二七）との交際が突如として記されているが、循吉は十三歳年長、允明は十歳年長である。循吉は成化二十年（一四八四）に進士に合格し、礼部主事とな

るが、弘治初年官を辞して蘇州に帰ってくる。これらの先輩との交際が始まる前に、微明には呉興学やさらに進んで府学に入學し、唐寅（一四七〇—一五二三）らの若者たちとの交際があったはずである。

江氏年譜は、微明十六歳（成化二十一年、一四八五）に唐寅との交際が始まったことを記している。この年、唐寅が府学の生員となり、張靈（字は夢晋、呉の文人）と学校の池で真裸になつて水合戦をしたという話は有名である。当時文林は蘇州に帰つており、唐寅の才能を愛したので、唐寅は微明の家を訪うことが多かつたのである。

微明は唐寅というまるで性格の反対な商家出身の天才少年と交際するようになり、その積極性に引きずられるようにして、年長者たちとの交際に入つていたのである。甫田集卷二三の題希哲手稿という文章に、

右は応天の倅、祝君希哲の手稿一軸なり。詩賦雜文共に六十三首。皆癸卯（一四八三）・甲辰（一四八四）の歳の作なり。時に於て君は年甫めて二十有四、同時に都君元敬（都穆）なる者有り。君と並びに古文を以て呉中に名あり。其の年相ひ若き、声名も亦た略相い下す。而して祝君尤も古邃奇奥にして、時の重んずる所と為る。又数年、某、唐伯虎と亦た其の間を追逐し、文酒倡酬して時日を間てず。時に于て年少氣鋭、儻然として皆な古人を以て自ら期す。

とあり癸卯・甲辰すなわち成化十九年二十年ころの制作の絵を見て、文微明は少年時代を追懐している。これによれば、当時祝允明は都穆（一四五九—一五二五）と共に、文壇の双壁であつた。数年の後、微明と唐寅がその仲間に加わつて行つたことが明らかに成るであろう。

弘治元年（戊申、一四八八）十九歳のころ、微明は数人の友人と共に古文の學習に熱中していた。それは科挙受験には好ましい勉強法ではなかつた。その結果、彼は今後何度も試験に失敗することになった。この間のことについて、甫田集卷二五、上守谿先生書には、

某、蚤歳自り即ち是に志有り。先君に侍して四方に宦游す。既に師承無く、終に麗沢鮮し。俛俛たること数年、成就する所靡し。年十九にして具に還り、同志の者数人を得て、相い与に詩を賦し文を綴る。時に于て

年盛んにして気鋭く、自ら量度せず。倜然として古人を追ひて之に及ばんと欲す。未だ幾もあらずして数人の者或いは死し或いは去る。其の在る者も亦た盟に叛き習を改む。而して某も亦た親の命を以て、選ばれて学官に隸す。是に於て文法の拘有り、日に惟だ章句に是れ循ひ、程式の文是れ習ひ、而も中心竊かに鄙とせり。稍稍、或は其の間隙を以て、左氏・史記・兩漢書、及び古今の人の文集を諷誦す。一時の曹竊、之を非笑して以て狂と為さざるなし。其の以て狂と為さざる者は則ち以て矯となし迂と為す。惟だ一二の知己之を隣れみ、子の才を以て程文を為らば難きこと無し、蓋そ是に精にして、他日雋を得るを俟ち、古文を為るも晩きに非ず、と。某亦た以て然りと為さず。蓋し程式の文には工拙有り。而して人の性に能有り不能有り。若し必ず精詣を求めば、則ち魯鈍の資は復た是れ望み無し。就いて之を觀れば、今の雋を得たる者は皆自然らざるなり。是れ殆ど命有り。苟も命無ければ終身第せず、則ち亦た將に終身古文を為るを得ざらん。豈に負かざらんや。是を用て群議を排して之を為りて顧りみず。而して志は則ち分れぬ。是に縁りて彼此皆な成る所なし。而るに長老先生、或いは其の作る所を見、従ひて之を人に稱し、以て能と為す。而るに知らざる者は以て眞の能なりと為し、遂に相い率めて走り、其の文を求め、往往にして困塞するに至る。某其の意に逆ふこと能はず、皆な勉めて之が求むる所に副ふ。皆餞送悼挽の風なり。其の又下は則ち世俗のいはゆる別号にして、率ね強顔不情の語多し。凡そ某のいはゆる文とは率ね是の類なり。ああ是れ尚ほ文為るを得んや。

と謙遜の意を含めつつもこう述べている。徵明は試験合格のための八股文を学ぶことを好まなかつた。彼の才能があれば十分にその可能性はあつたのに、形式ばかりで内容のない八股の文章よりも、古文を愛したのである。そのため府県学における学習と相剋を生じ、当然試験には落第し、古文の能力にも自ら限界を意識した。それとは逆に名声ばかりが先走って、作文依頼が相い継ぐようになった。そのことへの自嘲めいた感情が彼の心を占領し始めていた。この文章は、やや後の制作であろうが、十九歳に呉に帰り、その後、古文学習と科挙試験勉強が同時に始まつていたことを示している。そしてそれまでは、父の転任に附随していたため、よい教師と学友に恵まれなかつたことを明記している。

この年、文林は南京太僕寺少卿に任ぜられた。徵明も南京に赴き、父の同僚の李応禎（一四三一—一九八）より書を学んだ。行略にいう、

温州南太僕寺に在り、少卿李公応禎、博学好古、性剛介にして近づき難く、許可する所少し。而して独り公を重んず。公も亦た弟子の礼を執り惟れ謹む。一日公の書の稍玉局（蘇軾）の筆意に渉るを見、即ち大いに叱りて曰く、「工夫を破却す。何ぞ人の脚踵に随ふを用ひん」と。且つ曰く「吾、書を学ぶこと四十年、今始めて得ること有り。然れども老いて益無し」と。因りて筆法を以て公に授く。

は、徵明の書風に一陣の新風を吹きこんだ事件として有名な話である。同じく行略の末文には「徵明は若い時書が下手であった。しかし努力して臨書を学び、宋・元の書を手本にしていたが、筆意を悟ってからは晋・唐の書を手本にした。徵明の小楷は王羲之の黄庭経や樂毅論から来ているが、温純精絶で、虞世南・褚遂良以下は問題にならない。隸書は鍾繇を手本とし、一世に独歩している。」と記している。王世貞は文先生伝に、「書法は手本としないものはなく、歐陽率更（詢）・眉山（蘇軾）・予章（黄庭堅）・海岳（米芾）などはお手のものである。小楷は特に精絶であり、山陰父子（王羲之・献之）のレベルに在る。八分は鍾太傅（繇）の域に至っており、韓（擇木）李（陽冰）以下は問題にならない」と称賛している。おそらく十九歳ころ、南京において李応禎について、王羲之・鍾繇・歐陽詢・虞世南・褚遂良らの晋唐古典書道を学習し新境地を開いたことをこれらの文献は語っているのであろう。

このように詩文の才能は向上したが、科挙の試験には合格できなかった。行略文にいう、

南濠都公穆は博雅にして好古、六如唐君寅は天才俊逸なり。公二人者と共に古学に耽り、游従甚だ密なり。

且つ温州に言ひ、之を当路に薦めしむ。都竟に起家し、己未（弘治一二、一四九九）の進士となる。唐も亦た南京の戊午（弘治一一、一四九八）の解元に中る。時に温州任に在り。書を還して公を誡めて曰く、「子畏（唐寅）の才、宜しく発解すべし。然れども其の人軽浮にして、恐らくは終に成るなからん。吾が見は他日遠く到り、及ぶ所に非ざるなり。」

微明より十二歳年長の都穆（一四五九—一五二五）が進士に合格するのは当然としても、同年の唐寅が解元及第を果してしまった。悲観した微明を優しく励ますのは父文林であった。既に微明は二十九歳になっていた。微明は九歳年少の徐禎卿（一四七九—一五二一）と親近し、詩を贈答しあった。この禎卿も弘治十八年（乙丑、一五〇五）に進士に合格してしまふのである。

行略は次に、文林の死と、却金亭建立の逸話を伝える。

温州任に在りて疾有り。公、医を挾みて往く。至れば則ち前だつこと三日にして卒せり。時に属県、千金を賻遺するも、公悉く之を却く。温人、亭を構へ、以て美を致すと云ふ。

文林は弘治十二年（己未、一四九九）六月七日に温州で死亡した。彼の身体は肥満し、背中に悪性腫瘍が出来た。それが原因で死んだのである。温州の人々が彼の治政に感謝して、微明から返却された香奩千金で却金亭を構築した。十二月十一日微明は父を葬った。

文微明が、沈周から画を学んだのは、弘治二年（己酉、一四八九）二十歳の時であった。江氏の年譜によれば、この年、雙峨僧舎に沈周を訪ねた微明は、周の長江万里図を見て甚だ羨望した。周は笑って「絵は私の以前からの不幸の種。君はどうして絵がやりたいのかね」と訓誡したという。後に周は微明に画法の要点を教えて、「画法は意匠と経営を主とするが、しかし氣運が生動することを最高とする。意匠は及び易いが、氣運には他に三昧ということがあって、言葉では伝えられないものだ」と言った。又沈周はある時、微明の判浩・関全を臨模した小幅に題して、「荆関を把りて画法を論ずる莫けん。文章は胸次に江山有り」と書いたという。沈周の意図は、絵画などに熱中することよりも、文学の学習に重点を置き、進士に合格して欲しいという所にあったのである。

行略は三十歳代の微明について述べる。

温州既に没するや、公の与に遊べる諸君、祝（允明）・唐（寅）・都（穆）・徐（禎卿）、皆科目に連りに起つども、公は教試して利あらず。乃ち難じて曰く、「吾、豈に時文を能くせざらんや。得と不得は固より命

あるのみ。然れども吾をして匍匐して時好に合せんことを求めしむるは、吾、能はざるなり」と。是に於て益力を肆にして古文詞を為る。

後輩の徐禎卿にまで先を越された徵明は、もつともつと若い後輩と親しくなった。行略にいう、時に雅宜王君寵は異才なり。公より少きこと二十四歳。公雅より相い推重す。引いて遊処を与にす。王竟に徳学を以て名あり。

王寵（一四九四—一五三三）字は履吉、号は雅宜山人。徵明と同郷の人で、後に諸生から太学に入學。文徵明の推挽を受けたが四十歳で死亡した。徵明はその死を惜しんで墓誌銘を書いた。王世貞は王寵の詩を、「王履吉は郷少年の久しく都会に遊ぶが如し。風流詳雅なれども、盡くは本来の面目を脱せず。又揚州の大宴、鮭珍水陸と雖も、時に宿味有るに似たり」と軽妙な比喩で批評している。時流を追っているかに見えて、実は本質的なものが見え隠れしていると言いたらしい。顧璘（一四七六—一五四五）の批評、「履吉の詩は風骨を刻尚し、輕靡を擺脫す。既に体裁を正し、復た蹊径を滅す。五言は沈鬱にして曹植・鮑照に類し、七言は跌宕にして杜甫・岑参に類す。近体は盛唐の諸家と相い雄長す」と、王世貞の批評とを照らし合わせてみると、正に明代前後七子の古文辞派の主張に沿う詩風をもった若い詩人であったことがわかる。それは又、文徵明が育てた若い世代であった。

弘治十七年（甲子、一五〇四）徵明三十五歳の春、沈周は落花の詩十首を作り、徵明に示した。徵明と徐禎卿は和韻の詩十首を作った。沈周は喜んで、又も和する詩十首を作った。徵明はこの年南京に行き太常卿呂憲（一四四九—一五一二）に会い、この詩を示した。呂はその詩を読んで歎羨し、自分も和詩を作った。沈周は又もそれに和する詩十首を作ったので、合計三十首の詩が短時間のうちに完成した。この年の十月、徵明は沈周の詩三十首を書き、自分と徐禎卿・呂憲の和詩三十首を併せて極小の楷書で落花詩冊一卷を作り文壁と署名した。また唐寅も沈周の詩すべてに和韻して三十首を詠じた。時に沈周は、七十八歳であった。

この風流韻事は日本にも伝わり、文化十五年（一八一八）中島櫻隱は、陳仁錫の石田先生集から三十首、列朝

詩集所収の二十首のうち、本集に載せない三首を付録し、更に唐寅の三十首、文徵明の十首、徐禎卿の四首を合併して「明賢詠落花詩」⁽¹⁶⁾一冊を編集した。

この落花唱和の詩篇ほど明瞭にこの文人たちの詩才を見るのに適したものはない。沈周は衰老を嘆きながら、その詩は妖艶で、執拗に落花の風情を追求し分析し、典故を駆使し、巧妙に比喩して飽きることがない。

其 八

芳菲死日是生時 芳菲の死する日は是れ生ずる時、

李妹桃娘盡欲兒 李妹桃娘^{こくとと}尽く兒あらんと欲す、

人散酒闌春亦去 人散じ酒闌^{たけなわ}にして春も亦た去る、

紅消綠長物無私 紅消え緑長じて物私なし。

青山可惜文章喪 青山惜むべし文章の喪ぶるを、

黃土何堪錦繡施 黃土何ぞ堪へん錦繡を施すに。

空記少年簪舞処 空しく記す少年簪舞の処、

飄零今日鬢如絲 飄零す 今日 鬢糸の如く。

これに応ずる徵明の詩は、第四首目である。

蜂撩褪粉偶粘衣 蜂は褪粉を撩めて偶衣に粘し、

春減都消一片飛 春は減じて都て消ゆ 一片の飛ぶに。

帶撓園風無那弱 帶は園風に撓んで 弱きを那ともする無く、

影搖庭日已全稀 影は庭日に揺れて 已に全く稀なり。

樽前漫有盈盈淚 樽前 漫りに盈盈たる涙有り、

陌上空歌緩緩歸 陌上 空しく歌ひ 緩緩として歸る。

未使小齋渾寂寞 未だ小齋をして渾て寂寞たらしめず、

緑陰幽草勝芳菲 緑陰幽草 芳菲に勝る。

と、蜂の動きから花帯へと落花の後の寂寞さを客観的に追ってゆき、散策の後に書斎に入れば、かえって初夏の緑が眼を慰めてくれるさまを詠ずる。極端な感情を抑えて、季節の推移をすなおに受け入れている。

唐寅の和詩は第八首で、次のようである。

蟄燕還巢未定時 蟄燕 巢に還って未だ定まらざる時、

山翁散社醉扶児 山翁 社に散じて酔うて児を扶く。

紛紛花事成無頼 紛紛たる花草 無頼を成し、

默默春心怨所私 默默たる春心 所私を怨む。

雙臉胭脂開北地 雙臉の胭脂 北地を開き、

五更風雨葬西施 五更の風雨 西施を葬る。

匡牀自拂眠清昼 匡牀 自ら払って清昼に眠れば、

一縷茶煙鬢髮絲 一縷の茶煙 鬢糸屬る。

花に浮かれた日々が去り、夢中になった花も散ってしまった。ま昼なか茶煙の揚る臥床に一人疲れて眠る詩人を描いて頽唐、流暢洒脱である。徵明の詩は平声微韻で、他の二首の支韻とは必ずしも正確には諧和しないかもしれないが、近接の韻なので掲げた。和詩の数といい、技巧といい、唐寅に及ばないかもしれないが、彼のおおらかでまじめな歌いぶりを愛する人はまた多いのである。

正徳三年（戊辰、一五〇八）徵明三十九歳の六月、徵明は沈周の落花図に落花詩十首を書き装丁した、絵の方は絹本で詩の方は紙本、全長四メートルに及ぶ長巻である。実はそれより七年前、弘治十四年（辛酉、一五〇一）夏に沈周は具寛のために落花詩の画の巨軸を作っている。それ以前に周は落花詩三十首を具寛に贈っており、喜こんだ具寛は大きな紙を出して、絵を描いてもらい、詩もついでに書いてもらったのであった。

このような過程を見ると、文人は自作を他の文人に贈ったり、共同したりして詩書画の渾融した芸術世界を作

つていたのである。彼等の創作活動は孤立せず、周囲にすぐれた合作者、批評家、鑑賞者を用意していた。彼等は創作家となるかと思えば批評家になり、鑑蔵家になった。このような高度で平等な芸術的世界を、当時の蘇州の文人たちは形成していた。このような世界を中国社会はかつて持ったことがなかったのである。

五、文徵明の壮年期

行略は、徵明の壮年期の声望にふれてこう述べている。

公、年漸く長じ、名益起る。而して海内の交り、多くは偉人なり。皆公を敬畏す。

故に天下之を傾慕す。

徵明はすぐれた人物と交際した、そのことが逆に彼の名声を高いものにした、というのである。徵明は五十三歳まで、落第受験生だった。彼は芸術家として生きることの喜びの反面に、父の遺志を受けて官界に出ることの困難さに長く痛めつけられなければならなかった。

二十五歳（一四九四）の除夜に、

人家除夕正忙時 人家は除夕にして正に忙しき時、

我自桃燈揀旧詩 我は自ら燈を挑げて旧詩を揀ぶ。

莫笑書生大迂闊 笑ふ莫れ 書生 大だ迂闊なりと、

一年功課是文詞 一年の功課は是れ文詞。

という詩を作り、学習の一年を回顧して自らを励ましているが、翌年の除夜には、老親と幼女に囲まれた団樂の中にありながら、「……終歳の悲歎言尽し難し／一燈团聚すれば福消え難し／桃符日曆年年好し／謂はじ青春却つて暗澹なりと。」と落第の悲しみを詠っている。

こういう悲哀を何度となくくり返しながら彼が四十歳（正徳四年己巳、一五〇九）を迎えたとき、蘇州文壇の

中心であり長老だった沈周は八十三歳で世を去った。彼は父の次に尊崇する人物を失ったのである。

不堪惆悵失瞻依 惆悵たるに堪へず 瞻依を失ひて、

手把圖書夢已非 手に圖書を把るも夢は已に非なり。

文物盛衰知数在 文物の盛衰 数の在を知る、

老成凋謝到公稀 老成凋謝し 公に到るは稀なり。

石田秋色迷寒雨 石田の秋色 寒雨に迷ひ、

竹墅風流自夕暉 竹墅の風流 自ら夕暉。

未遂感恩酬死志 未だ遂げず 感恩酬死の志、

此生知己意長違⁽¹⁹⁾ 此の生の知己 意長へに違ふ。

四十三歳(一五二二)のとき、徵明はなお諸生であった。送提学副使莆田陳公叙に、「某諸生を以て公に國士の知を一辱⁽²⁰⁾くすること此に十年。潦倒成る無し。方に懼る門牆の羞と為らんことを」と記している。

四十四歳(一五二三)のとき、徵明は友人顧璘の左遷を送った。璘は徵明より七歳年下の同郷人であった。宦官に罪を得て、開封の太守から広西の全州に左遷されて行くこの友人を励まし、「其の罪を得て去る、人方⁽²¹⁾に之を危ぶむに至るも、余竊かに以て喜びと為す。是の若くんば則ち誉毀榮辱も、皆以て論ずるに足らず。君にして所謂文学吏治すれば、以て君に尽すに足らん。然れども余卒に天下の士を以て之に題す。亦た其の存する所を求むるのみ……」と、知己が自分の主張を屈しないことを喜ぶのである。

四十五歳(一五二四)のときもなお徵明は諸生であった。送提学黄公叙に、「正徳九年……某⁽²²⁾諸生の中に在りては最も凡下⁽²³⁾為り。然れども摘裂牽綴する能はず。曩時に在りて甚しと為す。」と述べるが、それは八股文学習を拒否し続けた結果であることは自らもよく知っていた。この年江西にいた寧王宸濠に厚礼をもって招かれたが、徵明は拒絶した。同時に唐寅にも招待の手がさしのべられ、唐寅は南昌に赴いた。その結果、危うく謀反者の徒党になる所を、やっとのことで脱出して蘇州に帰ってきたことは前稿で述べた。行略には次のように記している。

寧藩、人を遣はして厚礼を以て来聘す。公、其の使を峻却す。同時の呉人、頗る往く者有り。公曰く「豈に爲す所是の如き有りて、能く久しく藩服を安んずる者ならんや」と。人殊に以て然りと為さず。寧藩叛逆するに及んで、人始めて公の遠識に服す。

徵明の声望はこの事件でひときわ揚つたようである。失敗した唐寅は、正徳十年（一五一五）に帰つてきて以来、次第に外出しなくなり、徵明ともめつたに会わなくなつた。そして町に面する小樓にとじこもる日が多くなるのである。

四十六歳（一五一五）の時、県の文学劉林のために褒節堂記を書いた。文学の母余氏は、十九歳のとき夫劉漢を失い、何度も自殺を試みるが救出される。それから二歳の少年林を養育し、舅姑を送つて五十三歳になつた。かくて彼女の家は表彰され、林も郷進士に推薦せられ、長州に文学として赴任した。徵明はその門生であるといふことで、劉の作つた褒節堂の文を作らされたのであつた。十二歳も年下の教師のその母親のために、門生たる徵明は文章を書かねばならなかつたのである。

四十七歳（正徳十一年、一五一六）のときの八月末、徵明は七度目の南京における郷試の試験に落第した、矢解東帰口占の詩に、

七試無成只自憐 七たび試みられて成る無く只だ自ら憐むのみ、

東帰還逐下江船 東帰還逐す 江を下るの船。

向來罪業無人識 向來の罪業 人の識る無く、

虛占時名二十年 虚しく時名を占む 二十年。

二十年來の名声をもつてしても、郷試の一つに合格できない不名誉。それは古文や書画ばかりに熱中している「罪業」のせいであるのだが、それは人の知らぬこと。そのような悲しみも、書齋停雲館に帰れば自然と消えてゆくのであつた。初歸檢理停雲館有感の詩に、

京塵兩月暗征衫 京塵兩月 征衫暗く、

此日停雲一解顏 此の日停雲に一たび顔を解く。

道路何如故郷好 道路 何ぞ故郷の好きに如かんや、

琴書能待主人還 琴書 能く主人の還るを待てり。

已過壯歲悲華髮 已に壯歳を過ぎて華髮を悲しみ、

敢負明時問碧山 敢て明時に負いて碧山を問ふ、

百事不啻惟美睡 百事営まず 惟だ睡を美しとすれば、

黄花時節雨班班 黄花の時節 雨班班たり。

と歌う。ざあざあ降り注ぐ秋雨の音を聞きながら、何もかも手につかず、ひたすら睡っている作者の姿が彷彿とする。

五十一歳（一五二〇）正徳十五年の除夜、書齋に掛けた王紱の画竹の軸を見ながら徵明は感慨に耽る。

醉墨淋漓玉兩株 醉墨淋漓たり玉のごとき兩株、

澹痕依約兩行書 澹き痕は依約たり 兩行の書、

不知丁丑人何在 知らず 丁丑 人何くにかある。

忽把屠蘇歲又除 忽ち屠蘇を把れば 歳は又除く。

涼影拂墻燒燭短 涼影は蘇を払って、燒燭短く、

清聲入夜聽窓虛 清声は夜に入つて 聴窓虚し。

不辭霜鬢蕭疎甚 霜鬢の蕭疎なること甚しきを辭せず、

已有春風繞敝廬 已に春風の敝廬を繞る有り。

百二十四年前、洪武三十年丁丑（一三九七）王紱はこの竹の画を描いた。元末の乱世を九菴山に隱世して遁れ、明初に推薦されて文淵閣に入り、中書舎人に任ぜられた高介絶俗の人物であった。山水竹石の画をよくしたこの文人の生涯を思っていると、白髪まじり頭髮の薄くなったことなどは気にならなくなる。自分もまたその可能性

がないわけではない。春はもうそこまで来ているのだ。——こういう微明の予感、二年後に見事に適中するのである。

六、翰林の悲哀

文林の予言と、二年前の予感は不思議な一致をもって実現する。巡撫李充嗣が微明を歳貢生として奏上したのである。行略には続けてこう述べる。

巡撫李公充嗣、露章して公を督学に薦め、次を越えて之を貢せんと欲す。公曰く、「吾平生規守す、豈既に老いて自ら棄てんや」と。督学も亦た強ふる能はず。

李充嗣(26)(一四六二—一五二八)が蘇州の巡撫となったのは呉鼎志卷六職官表五によれば正徳十二年であった。それ以来この有能な行政官は文微明の才能を認めていたのである。一方微明は、嘉靖元年(壬午、一五二二)五十歳のとき、南京に赴いて試験を受け、冬に蘇州に帰っていた。そして十二月提学南康先生なる人に書簡を贈っている。李充嗣の露章(公表を目的とした上奏文)はすでに南康の眼に入っていたであろう。しかしこの歳末、微明は三ヶ月に亘る病気に悩まされていた。不寝(28)の詩は子供たちの鼾声を聞きながら、「……病眼不眠に苦しみ／牀に循ひて遐嘆を発す／人世百年短し／吾が生已に強半／況んや此の貧賤の軀／時に小児の齧と為る／一臥五たび旬を經／形消え髪垂れて燦めく／神情日に以て摧け／志と業と交凌乱す……」と窮状を嘆いているところを見ると、まだこの年末にはこの情報は知らされていなかったのだ。また病中の詩四首の第三首は、

明経三十載 経を明らむること三十載、

潦倒雪盈簪 潦倒 雪簪に盈つ。

疾病乘虚入 疾病 虚に乗じて入り、

摧頽覺老侵 摧頽 老の侵すを覺ゆ。

安心方外藥 安心は方外の藥、

適趣箇中琴 適趣は箇中の琴。

澹泊窮生計 澹泊 生計に窮すとも、

高人獨賞音 高人のみ独り賞音せん。

と知音の存在を信じているけれども、他の詩には、友人も見舞に来てくれず、もう自分が死んだという噂が流れているとひがんだりしているのを見ると、やはり、五十三歳の年末は暗澹たる状態の中に呻吟していたのである。

嘉靖二年（癸未、一五二三）、徵明の人生は突如として變化した。行略に、

竟に壬午を以て貢上し、癸未四月京師に至る。

と記しているように、徵明は生員を以て歳貢生として上京することになった。江氏年譜によれば、二月二十四日家を発ち、同じ歳貢生の蔡羽（？一五四一）と同舟し、三月五日に淮安に到着、三月十二日に徐州に、三月二十五日に柳林閣に、四月四日魏家灣に、四月十九日北京に到着、王繩武の家に寄寓し、四月二十日に礼部に赴いて投文、二十四日に納卷、考査の時期は閏四月八日と決定した、しかし閏四月六日に優旨により翰林待詔（従九品）を授けられ、七日に謝恩の式に参内する。翰林待詔は翰林院の最末席であったが、この年の歳貢生は千二百名に及び、翰林院に官を得たことは最高の優遇だった。明会要卷四九選舉三徵辟雜錄の項によると、文徵明の他に儒士葉幼学が翰林待詔を授けられた。これらは破格の待遇で、他の大多数は、せいぜい府県学の教員だったのである。行略には翰林院における徵明を、

翰林の諸公、諸公の推与大いに甚しきを見、或いは以て過ぎたりと為す。公を見るに及び、咸共みなに推服す。

而して新都の楊公慎、嶺南の黄公佐、愛敬はなは尤だ至る。故事に、翰林入ることの先後を以て坐次と為す。公既に長じ、其の中に又公の後輩た為る者有り。遂に齒とを以て公に譲り、公竟に上坐す。衆も亦た以て迂なぶと為さ

す。

と書いている。翰林院で微明を敬愛した楊慎（一四八八—一五五九）は字は用修、号は升菴、正徳六年廷試第一位の合格者で翰林院修撰（従六品）を授けられた逸材であった。この時は経筵講官の榮譽を担っていたのである。黄佐（一四九〇—一五六六）は、字を才伯といい、正徳十六年の進士で、庶吉士に選ばれ、編修（正七品）を授けられていた。程朱の学を奉じ泰泉先生と称される儒者であった。黄佐と同列には翰林院編修に湛若水（一四六六—一五六〇）や呂柟（一四七九—一五四二）郷守益（一四九一—一五六二）のような大儒者がいて、侃々諤々の論を展開していた。末席ではあったが、すぐれた人材の中に微明は位置したのである。微明の得意の情は想像に難くない。

しかし、歳貢生として上京する時の微明の気持は決して明るいものではなかったであろう。彼としてはなんといつても蘇州での生活が好ましいものであり、祖父のように、遠い他国の県学の教師などには決してなりたくなかったのである。だから旅行中の詩篇は不安と望郷を詠するものが多い。例えば徐州清明の七律には、

等間行役輕墳墓 等間に行役して墳墓を軽んじ、

忽慢逢春感歲時 忽ち慢りに春に逢ひ歳時に感ず。

日暮滿帆風獵獵 日暮滿帆 風獵獵、

蕭然雙鬢不禁吹 蕭然たる双鬢 吹くを禁ぜず。

とこの旅をついといい加減な仕官の旅であると言ひ、泊舟泗上看月の七律には

酒醒分明天上坐 酒醒めて分明なり天上の坐、

更從何処覓星槎 更に何処從り星槎を覓めん。

と、月や星座をながめつつ、これから与えられるであろう任務が、官界の星座に漕ぎつくいかなる筏になりうるのか、心細い思ひでいる。同様な心境は、道出淮泗、舟中閱高常侍集、有自淇涉黃河十二首、因次其韻の第五首目の五律の詩にも自ら露出している、

暑寒有恒期

暑寒 恒期有り、

人事無能測

人事 能く測るなし。

魚鳥独会心

魚鳥のみ独り心に会す。

忻然似相識

忻然 相識に似たり。

また、泊魯橋次九遠韻は、蔡羽の詩に和したものであるが、魯の獲麟の故地に舟泊りし、夜船頭たちの話を聞きながら、

嗟余老無成

あゝ余 老いて成る無く、

白髮事行旅

白髮 行旅を事とす。

明発不得休

明発 休するを得ず、

晨飧帶沙煮

晨飧 沙を帯びて煮ん。

と、そのあわただしい旅を悲しむ。

さらに北上し、かつて父に従って生活した博平県の魏家湾に宿泊したとき、徵明の感情は一層複雑になる。魏

家湾有感の詩に、

博平裏侍親時

博平県裏 親に侍せし時、

四十年來兩鬢糸

四十年來 兩鬢の糸。

竹馬都非前日夢

竹馬都て非なり 前日の夢、

枯魚空負此生悲

枯魚空しく負ふ此の生の悲み。

已無父老談遺事

已に父老の遺事を談ずる無く、

独有声名繫去思

独有声名の去思を繫ぐ有り。

憔悴平生塵土跡

憔悴す平生塵土の跡、

魏湾流水会能知

魏湾の流水 会す能く知らん。

と曾遊の地を訪れながら、空しさと哀しみを感ずるのである。そればかりではない、兩宿武城追和先温州夜武城二首の詩にも、かつて父がこの地で作った詩を思い出し、「百憂双短鬢／千里一孤舟」「酒醒めて青燈暗く／春寒一夜生ず」と暗い孤独感を歌っているし、次韻九遠阻雨の詩では、「行路の憂に堪へず／中夜華髮生ず」と旅の苦難を歌い、後の句では故郷をしのんでいる。さらに甚だしいのは懷石湖寄吳中諸友の詩で、「幾度か扁舟夢中に去りし／知らず塵土の天涯に在りとは」と結ぶところなどは、全くこの上京の旅を空しいものに帰しているのである。

北京において翰林に出仕する生活が始まったものの、微明の生活費は底をついてしまっていた。借家するため下僕を蘇州に派遣し、吳夫人から銀五十七兩を工面してもらい、夫人の上京をうながした。彼の俸給ではその日暮らしがやっとだったのである。そしてこの秋には寒病を患らうありさまになった。

こうした窮状も夫人の着京によって改善されたらしく、嘉靖三年（甲申、一五二四）より五年に至る二年半は、書画の作品も見られるようになる。しかし、世宗嘉靖帝が父興獻王祐杭を尊崇して興獻皇帝と称したいという強烈な意志から、進士張璉（一四七五—一五三九）の上奏を取上げ、反対する官僚に激しい懲罰を与えた。翰林の儒者楊慎は反対派の主唱者の一人となり、翰林二十二名を含む二百数十名の官僚と共に左順門に伏して抗議の哭声を挙げ、帝の意向に反対の行動に出た。帝は参加者の名を調べさせ、百九十人余を投獄した。それはつい杖刑を受けて死ぬ高官が続出する惨事に発展した。嘉靖三年七月の大事件であった。

行略にいう、

既にして実録を脩するに与かり、成る。官を遷るに当る。或ひと言ふ「宜しく先づ当道に謁見すべし」と。公竟に往かず。官も亦た遷らず。惟だ銀幣を賜はるのみ。公も亦た慰む所無し。是より先、羅峰の張公（張璉）、温州の拔んずる所の士為り。公も亦た与に交はる。張將に柄用せられんとし、遂に漸く之に遠ざかる。公、早朝に於て未だ嘗て一日も往かずんばあらず。偶、左臂を跌つき傷ひ、始めて門籍に注すること月余なり。時に礼の合わざるを議する者、言多く訐直なり。是に於て上怒り、悉く之を朝に杖し、往々にして死に至

る者有り。公幸に病を以て与らず。乃ち歎じて曰く、「吾れ東髪文を為り、樹立する所有らんことを期するも、竟に一策をも得ず。今亦た何ぞ能く強顔して久しく此に居らんや。況んや事を事とする所無く、而も日に太官を食む。吾が心真に安からざるなり」と。遂に謝して帰る。方に上疏せんとする時、或ひと言ふ「公、官に居ること已に三年、若し一考満たば、当に恩沢を得べし、或は進階すべけん」と。公笑つて答へず。竟に考満たずして帰る。時に丙戌の冬なり。

この文章は事件が前後しており、また史実と必ずしも合致していないが、徵明は楊慎たちのデモ行動に参加しなかつた。張璠と親しい関係からではないと行略は言いたいようだが、実はどうだったかわからない。大多数の翰林の官僚がデモをしているのに、彼がそれに参加しなかつたのは、今まで一度もしたことの無い欠勤を左腕の負傷事故でやむなく一ヶ月余りとなつていたのだという。欠勤は嘉靖二年九月、寒病にかかつた時に経験しているはずだし、腕の負傷ぐらいでデモに参加できないはずもない。おそらくもつと別の理由、自分は政治の渦中に勇敢に突入するほどの年齢でもなければ、その意志もないことを、このささやかな拒否行為で示したに違いないのである。彼の翰林における職務は武宗の実録を作成することにあつた。彼はその実務を忠実に尽せばよかつた。腕の負傷は筆写に支障するので休養を必要としたのであり、政治行動に興味が持てなかつたのであろう。

武宗実録一九七卷は嘉靖五年（一五二六）六月庚子に完成し、大学士費宏は少師兼太子太師に、石瑤と賈詠は太子太保武英殿大学士に昇進した。賈詠はデモに加つた翰林掌詹事府侍郎である。徵官の徵明は銀幣を賜わつただけであり、進級はなかつた。それでも、実録成賜燕礼部や実録成蒙恩賜襲衣銀幣、再賜銀幣の詩のような謝恩の詩を奉っている。また宮苑を散策したり、北京近郊の山や寺院を訪れ、多くの知人の送別の宴に招かれて詩を作り、絵を描いていた。病中懷吳中諸寺七首は、すべて望郷の想いが、徵明らしい優しさで歌われている。その竹堂寺寄無尽の詩はその寺の僧無尽に贈つたものであろう、

東城古寺万枝梅 東城の古寺 万枝の梅、

一歳看花得幾廻 一歳花を見るは幾廻なるを得ん。

竹逕三年無我迹 竹逕三年 我が迹無く、

松門此日為誰開 松門此の日 誰が為にか開ける。

還応壞壁余詩草 還た応に壞壁 詩草を余すべし、

只恐荒碑蝕雨苔 只だ恐る荒碑の雨と苔に蝕まれんことを。

憑仗山僧懸木榻 仗に憑れる山僧 木榻を懸く、

長安倦客且歸來 長安の倦客 且に歸來せんとす。

三年も梅花を見に行けないでいる竹堂寺。そこに住するあなたは格別私を待遇してくれた。北京での生活に疲れた私はもうすぐ帰ってゆくよ。と蘇州城東の古寺を懐しんでいる。

三年の任期が終り、武宗実録編集の作業が終った後は、一層翰林にあることが空しくなりまさってゆく。感懐の詩に「三十年來藥塵の蹤／若為ぞ老去して樊籠に入りたる」と歌い、五言絶句四首其三に「上書復た志無く／酒を把る自ら多情／国を籌るは諸公在り／吾何ぞ聖明に恥ぢんや」と傲倨し、其四には「青衫風駢に跨り／白首朝謁に供す／自ら笑ふ老いて還るを忘るるを／官の太だ拙なるを嫌はず」と自嘲する。送錢元抑（貴）南婦口号十首の其一に「一官貧薄僅かに三年／歸囊を計らず肯て遷を計る／笑殺す当時の高隱者／区区猶ほ待つ山を買ふの錢」と歌い、其六には「君が五十にして歸らん歎を賦するを羨む／我も亦た頭顱五十余／杖を把り遠き別れを傷むを須ひず／病夫も 行己に塵裾を厭はん」と官を辞する決意を示し、郷里の友人への伝言を托する。其十に「旧遊何れの処ぞ石湖の西／故友相い思ふて意迷はんと欲す／為に語れ近來憔悴し尽し／日に羸馬に騎りて胡鷄を聴くと」と、仕官の日常の空疎さを嘆き、郷友を恋いしたっている。送趙麗卿四首の其四には、「清秋北雁 尽く南征し／我独り東歸せんとして 計未だ成らず／為に語れ金陵文酒の伴に／年来の白髮滿頭に生ず」と言い、帰郷の決意は強くなりまさる。

七、帰国の喜び

徵明はよく北京を塵土と呼んでいる。その塵土を離れ故郷に向つたのは嘉靖五年丙戌（一五二〇）五十七歳の九月の末であつたようだ。致仕出京言懐二首其³¹一に感懐を述べ、

独騎羸馬出楓宸 独り羸馬に騎りて楓宸を出で、

回首長安万斛塵 長安を回首すれば万斛の塵。

白髮豈堪供世事 白髮豈に世事に供するに堪へんや、

青山自古有間人 青山古自り間人有り。

荒余三逕猶存菊 荒れ余せる三逕には猶ほ菊を存し、

輿落扁舟不為專 輿落する扁舟は專の爲ならず。

老得一官常臥病 老いて一官を得たるも常に病に臥し、

可能勲業上麒麟 能く勲業あつて麒麟に上る可けんや。

また、馬上口占謝諸送客十首にはむしろ明い別離を歌っている。其二首に「昔時客を送るに毎に帰らんことを懐ひ／千里の郷心日夜飛ぶ／回首すれば三年幾たびか離別せる／只だ応に今度は衣を沾さざるべし」。其三首に「小しく閭官に試みられて便ち身を乞ひ／素衣曾て緇き塵に染らず／諸君も亦た自ら情致多し／官人を送らず散人を送る」このようなユーモアが自然と口をついて出てくるのも、この離京が彼にとっていかに待たれたものであつたかを容易に想像させる。

徵明は帰途、十月に潞河の氷結に遇い、そのまゝ潞河で黄佐（一四九〇—一五六六、字方伯、翰林少詹事をやめて帰るところであつた）と一緒に元日を迎えた。漸く三月揚州に着き、花も散り過ぎたころ蘇州に着いた。還家志喜の詩に、

緑樹成陰逕有苔 緑樹陰を成して逕に苔有り、
園廬無恙客帰来 園廬恙無く客帰来せり。

清朝自是容疎懶 清朝是れ自り疎懶を容す、

明主何嘗棄不才 明主何ぞ嘗て不才を棄てんや。

林壑豈無投老地 林壑豈に老を投ずるの地無からんや、

煙霞常護誦書台 煙霞常に護る 誦書台。

石湖東畔橫塘路 石湖の東畔 橫塘の路

多少山花待我開 多少の山花 我を待ちて開く。

と故郷の自然に帰った喜びを歌っている。

行略には、離京後の状況を次のように述べている。

属河凍り舟膠して行く可からず。乃ち泰泉黄公（黄佐）と、同に凍を潞河に守る。疏して公を留めんと欲

する者有り。公人をして之を謝せしめて曰く「吾已に国を去りて偶此に滯まる。若し疏入らば、是れ我れ猶

ほ覬覦する所有るがごとし。何ぞ君、故人の此の如くなるを知らざる」と。留むる者遂に止む。或は公に陸路

より過やかに往き帰らんことを勧む。公曰く、「吾は斥逐せらるるを以て国を去るに非ず、行止均しきのみ。

何ぞ必ずしも窮日之れ力めて後快と為さんや」と。明春氷解け、遂に泰泉と舟を方べて下る。

この説明によって初めて微明の帰国が遅延した理由が判明する。呉夫人とすぐれた儒者の友人との気楽な解放さ

れた旅が一層彼の足を遅れさせたのである。彼はその凍結した河北の山河を凝視することによって、新鮮な画題

を収集していたのだった。

行略は一気に微明の死を記す。蘇州到着は五十八歳であったが、それ以後歿年に至る三十二年を僅か数行のう

ちに要約してしまふのである。

家に到るや、室を舎東に築き、玉磬山房と名づけ、兩桐を庭に樹ふ、日に裴徊して其の中に嘯咏す。人之を

望めば神仙のごとし。是に於て四方の求請する者、紛として至る。公も亦た随つて以て之に応じ、未だ嘗て厭倦せず。惟だ諸王府の幣を以て交はる者、絶えて与に通ぜず。豪貴人に及ぶまで、請ふ所多く其の望に副ふ能はず。曰く「吾老いて林下に帰り、聊か自適するのみ。豈に能く人の耳目の玩に供せんや」と。蓋し是の如きこと三十余年、年九十にして卒す。卒するの時方に人の為に志を石に書し、未だ竟らず。乃ち筆を置いて端坐し、而して逝く。儻儻として仙去せるがごとく、殊に苦しむ所なし。是の歳嘉靖己未二月二十日なり。これは文人画家として天下に徧き声望を持続し、最後の一刻に至るまで、文詩と共にする日々をもって生涯を閉ぢたことを語っているのである。

八、結 語

本文は文徵明の生涯と芸術について、特に詩文より彼の性格を窺うことを最初の目的とした。従つて、彼の後半生の成就と、詩文に関する批評を論じて終りとする予定であった。しかし紙幅の制限を超えようとしてその数節の部分を割愛せざるをえなかつた。しかしながら、既に多すぎるほどの詩文を引用し、彼の性格の幾つかの面を指摘し得たと思う。

清の朱彝尊は静志居詩話において徵明を批評して、「先生は人品第一、書・画・詩は之に次ぐ」と言っているが、それは決して彼の芸術を貶しめての言辭ではないのである。

(昭和五十六年八月三十一日)

注

- (1) 文徵明の伝記と文学について論じたものは近年あまりない。江兆申氏の「双谿読画隨筆」(国立故宮博物院、民国六六年刊)所収文徵明(二三八頁—一四五頁)は伝記と書画について簡潔に紹介されたものである。
- (2) 陳葆真氏の「陳淳研究」八二頁。国立故宮博物院、民国六七年刊。

- (3) 雲間ニ雲間派。沈士英らの画家を指す。
- (4) 屠赤水ニ屠叔方。秀水の人、万曆五年の進士。
- (5) 李霖燦氏「山水画技法、苔点之研究」五頁に董源・巨然の短筆麻皮皴（汪珂玉の珊瑚網を引く）について述べる。或は披麻皴を指すか。
- (6) 山根幸夫氏「日本現存明人文集目録」に収めるもの江戸刊鈔本等を加えて十七種、重複するものを除いても十種に近い。
- (7) 内閣文庫蔵の四冊本は曾孫震孟の明刊本である。十二冊本は六世の孫然の重梓本で、明代芸術家集彙刊本と同じもの後印本である。象が、改刻の部分が多い。
- (8) 明人伝記資料索引による。
- (9) 「文温州集」巻九、継母安人顧氏改葬墳誌、継母呂大安人墳志による。
- (10) 江兆申氏「文徵明画系年」図版篇による。
- (11) 王世貞「弇州山人四部稿」巻八三。及び「甫田集」巻頭に収める。
- (12) 吳寛「匏菴家藏集」巻七六、温州知府文君墓碑銘による。
- (13) 「甫田集」巻三一王履吉墓誌銘。
- (14) 「明詩綜」巻三八。
- (15) 「甫田集」巻二五呂公行状によれば、呂憲字は秉之、嘉興の人。成化の時礼部郎中。太僕寺少卿より南京太常卿となる。
- (16) 「和刻本漢詩集成」総集篇第七輯所収。
- (17) 「故宫書画録」巻四、一五九頁。
- (18) 「甫田集」巻一、甲寅除夜雜書五首の第三首。
- (19) 江兆申氏「文徵明与蘇州画壇」八七頁所引集外詩二六の詩による。
- (20) 「甫田集」巻六。
- (21) 「甫田集」巻六。送開封顧君左遷全州叙。
- (22) 「甫田集」巻六。
- (23) 「甫田集」巻一九。
- (24) 「甫田集」巻六。以下用例の詩同じ。
- (25) 明史巻二八六王綬伝。王綬字孟端。無錫人。博學工歌詩、能書画。山水竹石、妙絶一時。初隱居九童山、自号九童山人、又号友石生。永樂初以薦供事文淵閣、除中書舍人。性高介絶俗。有王舍人詩集。
- (26) 明史巻二〇一李充嗣伝。李充嗣字士修、成化二十三年進士。正徳中举治行卓異、巡撫河南応天、皆有声。進工部尚

- 書、修蘇松水利、嘉靖間改南京兵部尚書。
- (27) 江兆申氏「文徵明与蘇州画壇」一二二頁に明清画苑尺牘を引く。
- (28) 「甫田集」卷九。以下引用の詩同じ。
- (29) 「明会要」卷三十六翰林修國史の項、「明通鑑」卷五二による。
- (30) 「甫田集」卷一〇。以下用例の詩同じ。
- (31) 「甫田集」卷一一。以下用例の詩同じ。